

# 大東文化大学 東洋研究所所報

2023.7 No.79

## 目次

所長就任のご挨拶 所長 栗山保之	1
2023年度 東洋研究所共同研究課題	2～3
2022年度 東洋研究所共同研究班活動報告	4～7
〔国際交流講演会〕	
「新安船」を活用した中世東アジア海域交流史の教育方法論 高麗大学歴史教育科・副教授 鄭 淳一	8

2023年度 東洋研究所名簿	9
新刊案内	10
2022年度発行 『東洋研究』	11
訃報	11
2023年度 秋の公開講座のお知らせ	12

## 所長就任のご挨拶

大東文化大学 東洋研究所 所長 栗山 保之



この4月より東洋研究所所長を拝命いたしました。

本研究所は、1923年（大正12年）2月に創設された「大東文化協会」を前身とし、1961年（昭和36年）4月に大東文化学園振興計画によって、大東文化大学附置研究所「東洋研究所」となり、2023年（令和5年）2月には創立100周年を迎えました。

本研究所の専任研究員はわずか4名ですが、中国近現代政治、日中類書文化、中国天文学史、東西海上交渉史などの研究に精力的に従事しています。これらの専任研究員を中心として、兼担研究員や兼任研究員の方々、総勢80余名によって構成される共同研究班は、「中華人民共和国100年史研究」、「類書文化研究」、「アジア史のための欧文史料の研究」、「唐・李鳳の『天文要録』の研究」、「茶の湯と座の文芸」、「西アジア地域における社会と文化の伝統・交流・変容」、「岡倉天心（覚三）にとっての「伝統と近代」」、「南アジア社会における包摂と排除」、「明清の文言小説と文人たち」、「インド洋が取り結ぶ東西交流の諸相に関する研究」の10班を数えています。さらに、1961年に創刊された機関誌『東洋研究』は、2023年2月には第227号を刊行し、これまでに2300余篇もの論考が寄せられて

います。さらに、『藝文類聚 訓讀付索引』、『茶譜 注釈』、『大野盛雄フィールドワークの軌跡』、『イラン研究 万華鏡』などをはじめとする、じつにさまざまな分野の訳注書や研究書が多数、研究所から出版されています。

また、本研究所における教育活動については、専任研究員は学部や大学院の授業を担当し、教育に尽力しています。とくに今年度からは、全学プロジェクトの一環として講座「東洋学へのいざない」を開催しており、研究員が感銘を受けた名著・古典を書評形式で本学学生に紹介することを通じて、学生が学問により一層の関心をいさぐよう努めています。

本研究所では、このような研究・教育活動とあわせて、地域社会への貢献活動にも積極的に取り組んでいます。大学の所在地である板橋区と東松山市に居住される地域住民を主な対象として、夏休み公開講座や秋の公開講座において研究員の研究成果を公開しています。

本研究所所長を務められた故・中嶋敏先生は1981年、『東洋研究所20周年記念論文集』の「刊行の辞」において、「研究所の学術活動は大学の学的水準を高めるものであり、大学の声価を揚げるものでなければなりません。このような認識と自覚とをもって、われわれは研究所の運営を推進していくことを期する」と述べられ、研究所の研究・教育活動および社会貢献活動のあり方を示されました。本研究所は、2023年2月に創立100周年を迎えましたが、中嶋先生が掲げた研究所の使命を引き継ぎ、さらなる発展を目指してゆきたいと考えています。

今後ともよろしくご指導とご鞭撻とをお願い申し上げます。所長就任のあいさつといたします。

（くりやま やすゆき 東洋研究所 所長 専任研究員・教授）

# 2023 年度 東洋研究所共同研究課題

<b>第1班</b>	<b>中華人民共和国 100 年史研究一日中関係の今後を見据えて</b> 期間 2023～2025 年度（継続）
	メンバー（15 名） 団齊藤 哲郎〔主任〕 団鈴木 隆（新・オブザーバー） 団鹿 錫俊、高田 茂臣 団笠屋 一、伊藤 一彦、植松 希久磨、江崎 隆哉、岡崎 邦彦（新）、篠永 宣孝、柴田 善雅、嶋 亜弥子、由川 稔、田中 寛、福田 和展 概要 研究計画は 3 年間の短期計画（2023～2025）と 10 年をかけた長期計画（2020～2030）から構成される。計画では、日中関係を含む「中国共産党 100 年史年表」（1921～2020）、および「中華人民共和国 100 年史年表」（1949～2048）の二つの百年史年表を研究、整理し、さらに公刊に向けて準備する。 まず、中華人民共和国建国以前の歴史と日中関係について様々な分野から整理し、戦後日中関係において引き継がれた課題を明らかにする。さらに、中華人民共和国建国後については、これを毛沢東の時代（1949～1976）と鄧小平の時代（1978～2012）、そして習近平の時代（2012～）に分け、それぞれの内政、外交、日中関係について整理していく。そこでは毛沢東の「社会主義の道」、鄧小平が提起した「新たな社会主義と改革開放」、さらに習近平のめざす「中国の特色ある社会主義の新時代」構想、その政策の連続性と問題点について検討する。特に、習近平の中国の「中華振興」、「一路一帯」にみる世界認識と覇権主義、さらに国内における民衆の自由、民主の要求と共産党政治の問題点を明らかにする。 なお従来からのテーマ、20 世紀、21 世紀の中国の対外抵抗、対内改革と日本についての研究を継続させ、日中間であらたな世界秩序を創造していくモデルを考えていく。
<b>第2班</b>	<b>類書文化研究—『藝文類聚』を中心にして—</b> 期間 2023～2025 年度（継続）
	メンバー（10 名） 団田中 良明〔主任〕 団小塚 由博、高橋 睦美、宮瀧 交二、藏中 しのぶ 団芦川 敏彦、小林 敏男、中林 史朗、成田 守、浜口 俊裕 概要 本邦に伝来する最古の現存類書の『藝文類聚』は、我が国の古典文学に多大の影響を与えていることは周知の事実である。それが今日に至るまで雑家の書として等閑視されてきた嫌いがある。それ故、未読解の本書を訓読して、原典との校勘、典拠の解明、索引の作成をすることは、単に国文学への影響のみならず、類書学上においても大いに貢献するものであると考える。その研究成果を逐年刊行して今日に及んでおり、斯学の評価を得ている。なお、近年の研究活動の実態に即し、2020 年度以降は、研究課題を「日中文学の比較文学的研究」より「類書文化研究」に改めている。
<b>第3班</b>	<b>アジア史のための欧文史料の研究</b> 期間 2023～2025 年度（継続）
	メンバー（4 名） 団滝口 明子〔主任〕、ウルック・アンドリュウ 団齋藤 俊輔、出田 恵史 概要 本研究の目的は、アジアに関わるヨーロッパ人による旅行記や地理書、年代記などの研究を通じて、アジア史において欧文史料を再評価するとともに、アジア史の進展に貢献することにある。 近年まで、アジア史における欧文史料の位置づけは、ヨーロッパ中心史観の見直しが進む中で現地語史料に準ずるものとする傾向が強まった。しかし、最近では、アジアの現地語史料による研究が進んできたことで欧文史料の重要性が見直されている。実際のところ、欧文史料、とくに大航海時代以降について、年代記だけでなく、植民地文書、そして宣教師の書簡などが多く残り、アジア史研究にとって非常に重要であることはかわりない。また、ヨーロッパ中心史観としてアジア史に関連する欧語史料を排除することは研究の進展を妨げかねない。 本研究は、こうした現況をふまえ、アジア史に関連する欧文史料の研究を進める。具体的には、1) アジア史研究に有用と思われるヨーロッパ人による旅行記や地理書などに訳注をほどこし、出版することを目指すとともに、2) 当該史料の周辺を複数の同時代史料で補い、研究を深める。 なお、本研究の観点は、アジア史のみならず、近年盛んになっている「グローバルヒストリー」のような世界史研究に貢献するものとする。グローバルヒストリーは、世界各地の比較や連動性を重視している。本研究で取り上げる史料群は、アジアやアフリカ、アメリカでの交渉を含むものであり、その研究は世界史研究の進展にも十分資すると考えられる。
<b>第4班</b>	<b>唐・李鳳の『天文要録』の研究（訳注作業を中心として）</b> 期間 2022～2024 年度（研究期間中）
	メンバー（10 名） 団田中 良明〔主任〕、高橋 あやの（新） 団小坂 眞二、小林 春樹（新）、小林 龍彦、中村 聡、中村 士、細井 浩志、山下 克明、渡邊 義浩 概要 前田尊経閣文庫に現存する逸存書である『天文要録』（唐・李鳳撰）の訓読、訳注作業をおこない『天文要録』の考察〔5〕としての公刊を期す。
<b>第5班</b>	<b>茶の湯と座の文芸</b> 期間 2023～2025 年度（継続）
	メンバー（15 名） 団藏中 しのぶ〔主任〕 団相田 満、安保 博史、王 宝平、オレグ・プリミアニ、菅野 友巳、藏田 明子、笹生 美貴子、佐藤 信一、高木 ゆみ子、布村 浩一、フレデリック・ジラル、松本 公一、三田 明弘、矢ヶ崎 善太郎 概要 概要 2004（H16）～2006（H18）年度日本学術振興会科学研究費補助金・基盤研究（C）（2）「茶の湯と座の文芸の本質の研究—『茶譜』を軸とする知的体系の継承と人的ネットワーク」の成果、および 2008（H20）～2019（R1）年度の東洋研究所研究班「茶の湯と座の文芸」の成果として刊行した『茶譜 巻一注釈』～『茶譜 巻十一（下）注釈』を発展的に継承すべく、江戸時代中期寛文年間の成立とされる茶道百科事典『茶譜』全十八巻の注釈研究を継続しておこなう。 研究分担者は、科研費研究から継続して参加する藏中しのぶ（日本文学・上代中古文学）、相田満（人情報学・中古中世文学）に加えて、安保博史（日本文学・近世文学）、矢ヶ崎善太郎（建築史・茶室建築）、三田明弘（日本文学・中世文学）、バリから高木ゆみ子（歴史学・茶道史）、フレデリック・ジラル（仏教思想史）、中国から王宝平（日本文学）、また、新たに兼任研究員として、松本公一（歴史学・日本文化史学）、オレグ・プリミアニ（日本文学・日本語文化学）、菅野友巳（芸術学）、笹生美貴子（日本文学・中古文学）、布村浩一（日本文学・中古文学）、佐藤信一（日本文学・日中比較文学・中古文学）を迎え、茶道文献を対象とした学際研究をめざす。
<b>第6班</b>	<b>西アジア地域における社会と文化の伝統・交流・変容 —イラン・アラブ・トルコ文化圏の越境—</b> 期間 2021～2023 年度（研究期間中）
	メンバー（16 名） 団吉村 武典〔主任〕 団栗山 保之 団アブドリ・ケイワン、石井 啓一郎、遠藤 仁、藏田 明子、斎藤 正道、鈴木 珠里、ソレマニエ 貴実也、中村 菜穂、南里 浩子、西川 優花、林 裕、原 隆一、深見 和子、吉田 雄介 概要 西アジア地域は、イラン文化圏、アラブ文化圏、中央アジア・トルコ文化圏にまたがる広大な地域にまたがり、相互に交流しながら独自の社会、文化を構築、発展し続けてきた。例えば、アフガニスタン、タジキスタン、クルディスタンな

第6班	<p>どを含むイラン文化圏では、ペルシア語系の言語や太陽暦の春分を新年（ノウルーズ）として祝う生活文化があげられる。これらは周辺のアラブ、中央アジア、トルコ、インドなどの文化圏との歴史的な交流から生まれたものだが、同時にそれら周辺の文化圏が持つイスラームや遊牧民がもたらした文化や生活習慣もイラン文化圏に影響を与つづけて来た。</p> <p>本研究では、イラン文化圏を基礎とした社会文化の変容に関する研究を発展的に継承し、西アジア地域全体へと視野を拡大する。特に農業や灌漑技術の開発・拡散・需要、生活様式や用具の生産、流通、消費といったモノと、それらを利用する人々の技術（知恵）、思想、文学、歴史など知的生産物の双方を通して、西アジア地域の環境、社会、文化が持つ地脈を考察する。</p> <p>第3期まで当研究班が行ってきた、先人の研究成果やその手法の総括を継続し、研究参加者による新たな研究視点や手法を確立していき、研究成果の公表を積極的に行っていく。</p>
第7班	<p><b>岡倉天心（覚三）にとっての「伝統と近代」</b></p> <p>期間 2022～2024年度（研究期間中）</p> <p>メンバー（8名） 岡宮瀧 交二〔主任〕 岡池田 久代、岡倉 登志、岡本 佳子、佐藤 志乃、篠永 宣孝、田辺 清（新）、依田 徹</p> <p>概要 岡倉天心（1863-1913）は、幼時より漢籍そしてヘボン塾で英語を学び、東京開成学校に入学、1877年東京大学で政治学、理財学ならびにフェノロサについて哲学を学び、卒業後、フェノロサの日本美術研究に協力し、古美術の研究と新しい日本画の樹立を目指した。86年文部省の美術取調委員としてフェノロサとアメリカ経由でヨーロッパを巡り翌年帰国、東京美術学校の創設、90年校長に就任した。</p> <p>この間美術専門誌『国華』を創刊、日本絵画協会主宰、帝室技芸員選考委員、古社寺保存会委員に任ぜられ、98年校長を辞職、橋本雅邦、横山大観、菱田春草、下村観山らと日本美術院を創設、新しい日本画を目指して美術運動をおこした。1904年（明治37）大観、春草を伴い渡米し、ボストン美術館の仕事にあたり、05年同館の東洋部長となり、06年ニューヨークで『茶の本』を出版、その年の末に日本美術院を茨城県五浦へ移し、大観、春草、観山らと住み、07年文部省美術審査委員会委員となり、08年国画玉成会を結成、10年東京帝国大学で『泰東巧芸史』を講義した。翌年欧米旅行を行い、ハーバード大学からマスター・オブ・アーツの学位を受けた。続いて12年インド、ヨーロッパを経て渡米し、13年（大正2）病を得て帰国、療養に努めたが、同年9月2日新潟県赤倉山荘で没した。英文著書『東洋の理想』（1903）、『日本の覚醒（かくせい）』（1904）、『茶の本』（1906）などは外国人はもちろん、翻訳されて広く日本人にも影響を与えた。</p> <p>岡倉天心研究はまだまだ研究されなければならない点があるが、本研究部会においては、岡倉天心の「伝統と近代」に着目し幅広い研究を進めていきたい。</p>
第8班	<p><b>南アジア社会における包摂と排除</b></p> <p>期間 2021～2023年度（研究期間中）</p> <p>メンバー（11名） 岡鈴木 真弥〔主任〕、J・アバイ、篠田 隆、須田 敏彦、井上 貴子 岡石坂 晋哉、石田 英明、片岡 弘次、舟橋 健太、増木 優衣、ムハマド・ズベル</p> <p>概要 多言語多民族国家により構成されている南アジアでは、近年の政治経済社会変動のなかで、社会を構成する多様な集団間の統合とアイデンティティをめぐる関係も変化し、その結果、基本的人権や国民が平等に享受すべき諸種の権利から「排除」(Exclusion)される個人や集団が生じている。他方、この排除の現実を踏まえたうえで、多様な集団間の統合とアイデンティティの強化、すなわち「包摂」(Inclusion)を求める政治経済社会運動も展開している。</p> <p>本研究では、多様な民族、宗教、カースト、階級構成をもつ南アジア社会で周辺に置付けられてきた集団を対象として、彼らと社会変動との関わりを「包摂」と「排除」の観点から分析する。彼らはどのような文学、政治、社会運動をとおとして、自らの行動規範や価値観を再構成し新たなアイデンティティを模索し「包摂」を求めてきたのか、彼らに対してどのような「排除」の仕組みや圧力が働いてきたのかを、社会学や経済学を専門とする委員と歴史学、文学を専門とする委員の共同作業をとおして、総合的に研究する。</p>
第9班	<p><b>明清の文言小説と文人たち—張潮『虞初新志』訳注—</b></p> <p>期間 2023～2025年度（新規）</p> <p>メンバー（4名） 岡小塚 由博〔主任〕 岡田中 良明 岡荒井 礼、今井 秀和</p> <p>概要 清初の文人張潮が編纂した文言小説集『虞初新志』を訓読し、現代日本語に翻訳し、注釈等を施す。『虞初新志』には全20巻、150作品が収められている。</p> <p>明から清にかけて、「虞初」の名を冠した小説集が複数編纂されたが、とりわけ本作品は過去（六朝・唐等）の作品を集めたのではなく、同時代の人物の作品を集めたことが大きな特徴的である。彼らは編者張潮の友人・知人が多く、彼の交遊関係が大きく影響している。</p> <p>また、本作品は中国だけではなく、日本にも江戸時代中期以降に伝来し、和刻本が刊行されており、日本文学との関係も見られる。</p> <p>すでに作者、作品の解説・序文・跋文・凡例および巻一～巻三の訓・訳については、2022年2月に刊行済み（2019～2021年度研究班）であり、次は2025年2月を目途に巻四～巻六の三巻分の訓・訳を刊行し、以後3年に1冊のペースで訳注を刊行する予定である。</p>
第10班	<p><b>インド洋が取り結ぶ東西交流の諸相に関する研究</b></p> <p>期間 2021～2023年度（研究期間中）</p> <p>メンバー（5名） 岡栗山 保之〔主任〕 岡新居 洋子（新）、吉村 武典 岡新井 和広、太田 啓子</p> <p>概要 インド洋は、東アフリカ、西アジア、南西アジア、南アジア、そして東南アジアといった諸地域に縁どられた大洋である。古来、このインド洋を介して、これらの諸地域に居住する人びとは、ひんばんに交流していた。このような、インド洋を往来していた人びと、あるいは人びとが携え流通していたさまざまなモノ、または人やモノが動くことによって伝わる情報・技術・文化などの諸相について考察することが、本研究の目的とするところである。</p> <p>本研究でインド洋を中心的に取り上げる理由は、近年、中国がインド洋への進出を活発化させ、米国をはじめとする欧米諸国やアジア・アフリカ諸国はその対応に迫られており、いわばインド洋を舞台とした世界情勢の変容が観察されるようになっていくからである。この意味において、インド洋を中心とした東西交流の検証は、歴史的な事柄を考察すると同時に、すぐれて現代的な議論でもあると言えるのである。</p> <p>本研究で考察する東西交流とは、インド洋を舞台として、同海洋の東西に位置するヨーロッパやアフリカ、そしてアジアの間で展開していた、人・モノ・情報の往来・流通・伝播と、それらに関連・由来する諸事象を意味している。こうした交流の問題は、非常に多種多様な歴史的事象を包含していると考えられる。</p> <p>具体的には、イスラームが誕生した西暦7世紀前後からポルトガルをはじめとする西欧列強がインド洋でその勢力を拡大する18世紀ごろまでにおいて、ムスリム、キリスト教徒、ユダヤ教徒、あるいは仏教徒などの商人、職人、学生、旅人、軍人、船乗りといったじつにさまざまな職能を有する人びとが、商業、貿易、軍事、就職、修学、旅行、航海といったいろいろな目的の完遂をもとめて、自らが誕生し生活している社会、地域、あるいは国家から、異なる社会、地域、国家などへと、インド洋をわたって移動、移住、定着、帰還し、そうした営為が一時的、あるいは継続的に、そして相互的、または重層的に展開していたことを考察したいと考えている。</p>

## 2022年度 東洋研究所共同研究班活動報告

第1班	中華人民共和国 100 年史研究 ― 日中関係の今後を見据えて				
	研究班の活動				
	No.	開催日時	開催場所	参加人数	研究会 (テーマ・内容・発表者)
	1	6月11日	大東文化会館 404 研修室	10名	第1報告: 岡崎邦彦「中国共産党 100 年史年表について」 第2報告: 鏡屋一「1975 年の長征回憶録をめぐって」
	2	10月22日	大東文化会館 301 研修室	11名	第1報告: 田中寛「侵華日軍第七三一部隊罪証陳列館」と遺跡保護の現状・課題―戦争遺留問題と和解の視点からの一考察― 第2報告: 由川 稔「モンゴルの近況」
	3	12月17日	大東文化会館 302 研修室	9名	第1報告: 柴田善雅「著書『日本帝国圏満洲における民間金融』(ゆまに書房)について」 第2報告: 岡崎邦彦「年表『中共一百年大事記』から見る習近平政策」
	4	3月18日	大東文化会館 302 研修室	12名	第1報告 田中寛「方法としての中国近代思想研究―章炳麟、譚嗣同から李大釗、毛沢東思想形成へ―」 第2報告 岡崎邦彦「故近藤先生の毛沢東思想研究―著書『毛沢東―実践と思想』について」 第3報告 篠永宣孝「コンドラチェフの波と中国経済の崩壊」
	調査		新型コロナウイルス感染の拡大により、調査活動はしていない		
	No.	研究成果物 (出版物)			
	1	柴田善雅 タイトル 『日本帝国圏満洲における民間金融』 出版社等 ゆまに書房 発行年月 2022年11月30日			
No.	研究成果物 (論文)				
3	柴田善雅 タイトル 「帝国燃料興業株式会社の関係会社投資と戦後処理」 出版社等 『東洋研究』第225号 発行年月 2022年11月25日				
第2班	類書文化研究 ― 『藝文類聚』を中心に―				
	研究班の活動				
	No.	開催日時	開催場所	参加人数	研究会 (テーマ・内容)
	1	4月24日	オンライン	7名	『藝文類聚』巻52・53 訓読
	2	5月21日	オンライン	7名	『藝文類聚』巻53 訓読
	3	6月25日	オンライン	6名	『藝文類聚』巻53 訓読
	4	7月30日	オンライン	7名	『藝文類聚』巻53 訓読
	5	9月24日	オンライン	6名	『藝文類聚』巻53 訓読
	6	10月29日	オンライン	4名	『藝文類聚』巻54 訓読
	7	11月19日	オンライン	7名	『藝文類聚』巻54 訓読
	8	12月24日	オンライン	6名	『藝文類聚』巻54 訓読
	9	1月21日	オンライン	6名	『藝文類聚』巻54 訓読
	10	2月25日	オンライン	6名	『藝文類聚』巻54 訓読
	11	3月25日	オンライン	6名	『藝文類聚』巻54 訓読
No.	研究成果物 (刊行物等)				
1	『藝文類聚 (巻五十一) 訓読付索引』(2023年2月25日発行)				
第3班	アジア史のための欧文史料の研究				
	研究班の活動				
	No.	開催日時	開催場所	参加人数	研究会 (テーマ・内容・発表者)
	1	6月17日	オンライン	3名	今年度の共同研究計画について (全員)
	2	8月6日	オンライン	3名	ポルトガルのインドア領における火器の普及―「鉄砲伝来」の前提を考える (齋藤)
	3	9月11日	オンライン	3名	「武術の身体論のための試論」(出田)
4	12月26日	オンライン	3名	「茶の比較文化史研究 回顧と展望」(文化と社会の研究について考える 学際的方法論再考: 歴史学と人類学、比較思想・比較文化ほか) (滝口)	
(備考)	A. R. ウルック兼担研究員 (国際関係学部国際文化学科准教授) は学部のオーストラリア現地研修引率等の理由により研究会に出席できなかったが、主任の滝口と連絡を取り合い研究班の共同研究遂行に協力。研究成果を『東洋研究』その他に寄稿して、東洋研究所の研究活動に貢献した。				

第3班	No.	研究成果物（刊行物等）		
	1	滝口明子 「『茶の文化史—英国初期文献集成—』日本語解説（前半）」「大東文化大学紀要（人文科学）」第61号（2023年3月）		
	1	A. R. Woollock ① From acceptance through rejection to ambivalence: Three readings of Japanese society in film『大東アジア学論集』第22号（2022年5月）(pp10-29) ② Employing visual artefacts to generate oral and visual data: An exploration of e-ma 2022年7月『東洋研究』224号 (pp.57-90) ③ Applying molecular and structural theory to comprehending classroom dynamics and the learning transaction: Observations from the Japanese tertiary sector—a working paper『大東文化大学紀要（人文科学）』第61号（2023年3月）④ COVID+: The upside of COVID -19 in Japan - an extended photo essay『大東アジア学論集』第23号（2023年出版）		
	1	齋藤俊輔 単著 2022年12月「ポルトガルのインディア領の兵力—アントニオ・ボカロ著『東インド領すべての要塞、都市、そして集落の図会』の分析から」『東洋研究』第226号 pp.1-28		
	No.	その他		
1	滝口明子 ①「お茶から考える東西文化交流の500年」公開講座講師：大東文化大学東洋研究所・地域連携センター共催 東洋研究所100周年リレー講座「南・西アジア、東西文化交流関係」2022.10.1.大東文化会館 ②「ヨーロッパ茶文化の広がり～社交の場から家庭生活へ～」招待講演：日本紅茶協会ティーインストラクター会研究会 2022.11.4.（東京 ハイブリッド形式）			
第4班	唐・李鳳撰の『天文要録』の研究（訳注作業を中心として）			
	研究班の活動＝新型コロナ感染症蔓延のため、集合しての研究会は実施せず。			
	所属研究員の活動			
	No.	刊行物等準備		
	1	今年度の主要な研究活動の実際と、作業活動の課題とが、「『天文要録』の考察〔四〕」の刊行であるとともに、すでにその草稿は完成しているために、コロナ禍がまだまだ終息していない状況をも考慮して、個々の班員が在宅でその草稿の完成作業に専念することが最も合理的であると判断した。 したがって、現在（2022年10月）、田中良明が作成した、原文、訓読文、現代語訳の草稿を、各研究員が検討作業中であり、その結果を来月中旬、田中のもとに集約し一本化して当該刊行物の「原文・訓読文・現代語訳」の完成をはかるとともに、それと並行して、それぞれにかかわる「語釈・参考資料」、「注釈」、「コラム」の執筆作業を進め、最終的に、今年中に当該刊行物の原稿を完成し、それを各研究員が最終的にチェックして完成させて今年中に業者に投稿、そのうえで所定の期限までに納品、および出版の完成を期している。		
	2	継続している、『天文要録』の講読作業を行った。またその成果として、『天文要録』巻五「月占」の前半部分を対象とした「『天文要録』の考察〔四〕」を上梓した。		
No.	研究成果物（刊行物等）			
1	「『天文要録』の考察〔四〕」（2023年2月25日発行）			
第5班	茶の湯と座の文芸			
	研究班の活動（7月29日～8月7日まで夏期勉強会）			
	No.	開催日時	開催場所	参加人数
	1	5月29日	zoom 研究会	20名
	2	7月17日	zoom 研究会	23名
	夏期	7月29日	zoom 研究会	4名
	夏期	8月2日	zoom 研究会	3名
	夏期	8月4日	zoom 研究会	4名
	夏期	8月4日	zoom 研究会	3名
	夏期	8月4日	zoom 研究会	4名
	夏期	8月5日	zoom 研究会	3名
	夏期	8月7日	zoom 研究会	3名
	3	8月9日	zoom 研究会	15名
	4	8月10日	zoom 研究会	14名
	5	8月11日	zoom 研究会	16名
	6	8月27日	zoom 研究会	11名
7	8月28日	zoom 研究会	13名	
8	10月23日	zoom 研究会	10名	
9	11月13日	zoom 研究会	12名	
10	12月18日	zoom 研究会	10名	
				研究会（テーマ・内容・発表者）
				『茶譜』十四「1利休座敷寸法事 付腰張太鞍張①」（笹生）
				『茶譜』十四「1利休座敷寸法事 付腰張太鞍張②」（菅野）
				『茶譜』静嘉堂グループ 卷十四「9織部座敷寸法之事 付窓図」（笹生）
				『茶譜』国会グループ 卷十三「4菓子不時跡見茶湯事」（オレグ）
				『茶譜』国会グループ 卷十四「4菓子不時跡見茶湯事」「8塩器香爐之図」（三田）
				『茶譜』内閣グループ 卷十四「5同露地沓之事」（菅野）
				『茶譜』岩瀬グループ『茶譜』十三「3宗和短檠之図」「7小棚間香爐置合 附香聞様事」「11伽羅手入事」卷十四「2同座敷之事 付図」（布村）
				『茶譜』内閣グループ 卷十四「10織部流小棚・惣釘打所寸法事」（菅野、張）
				『茶譜』国会グループ 卷十四「3同天井之事」（オレグ）
				『茶譜』卷十三「1晨茶湯事 附路地行燈板燈籠」「3宗和短檠之図」（笹生、布村）
				『茶譜』卷十三「2夜茶湯事 附短檠行燈木燈台手燭」「4菓子不時跡見茶湯事」「5数寄屋間香爐置合」（菅野、オレグ、高木）
				『茶譜』卷十三「6釣香爐之事」「7小棚間香爐置合 附香聞様事」「8塩器香爐之図」「9書院卓香爐事 附香炉之図」「10香爐火加減事 附灰製」「11伽羅手入事」（菅野、松本、三田、相田、笹生、矢ヶ崎）
				『茶譜』卷十三 原稿最終確認「1晨茶湯事 附路地行燈板燈籠」「2夜茶湯事 附短檠行燈木燈台手燭」「3宗和短檠之図」「6釣香爐之事」「9書院卓香爐事 附香炉之図」「10香爐火加減事 附灰製」「11伽羅手入事」（菅野、布村、笹生、高木）
				『茶譜』卷十三 原稿最終確認「0茶譜目録」「4菓子不時跡見茶湯事」「6釣香爐之事」「7小棚間香爐置合 附香聞様事」「8塩器香爐之図」「10香爐火加減事 附灰製」「11伽羅手入事」（オレグ、菅野、松本、布村）
				「2同座敷之事 付図」「3同天井之事 付釘打所寸法」（布村、オレグ、北井）
				「3同天井之事 付釘打所寸法」「4同下地窓之事 付簾」（オレグ、笹生）
				「5同路地沓之事」「6妙起庵之図」（菅野、布村）

第5班	11	1月22日	zoom 研究会	13名	「6 妙喜庵之図」(松本、布村)
	2月の研究会は、「茶譜」巻13の校正作業のため、実施しなかった。				
	12	3月12日	zoom 研究会	16名	「6 妙喜庵之図」「7 少庵座敷図」「9 織部座敷寸法之事 付窓図」(布村、矢ヶ崎、オレグ、高木)
	所属研究員の活動				
No.	刊行物等				
1	<ul style="list-style-type: none"> <li>・『東洋研究』第225号に布村兼任研究員が「『管仲隋馬』の享受史—「成長」する故事」を、『東洋研究』第226号に松本兼任研究員が「香炉の茶の湯についての基礎的考察」を、藏中専任研究員が「『冤』の連環—南総里見八犬伝』第六輯口絵第一図「対牛楼」・第四図「庚申山」の照応—」をそれぞれ公表した。</li> <li>・『茶譜』注釈巻十三(2023年2月25日)を刊行した。</li> </ul>				
西アジア地域における社会と文化の伝統・交流・変容 —イラン・アラブ・トルコ文化圏の越境—					
研究班の活動					
No.	開催日時	開催場所	参加人数	研究会(テーマ・内容・発表者)	
1	6月12日	オンライン開催(zoom) (14:00~16:30)	26名	第1回 大東 西アジア研究会 報告:中村菜穂(大阪大学/東洋研究所兼任研究員)「近代イランにおける詩の革新について—立憲革命詩とその後の展開」 コメント:藤元優子(大阪大学名誉教授)	
2	8月7日	オンライン開催(zoom) (14:00~17:00)	25名	第2回 大東 西アジア研究会 報告者:ケイワン・アブドリ(神奈川大学/東洋研究所) タイトル:「イランの農地改革の歴史的意義について:農村社会の支配をめぐる国家、資本と農民の競争」 コメント:登利谷正人(東京外国語大学) タイトル:「アフガニスタン近代史における農地・水・土地との比較検討」	
3	9月25日	オンライン開催(zoom) (13:30~17:30)	22名	第3回 大東 西アジア研究会 「アジアにおける水の諸相」 発表1:吉村武典「西アジアの都市と水施設の諸相—前近代のカイロを中心に」 発表2:石井啓一郎(東洋研究所)「N・ヒクメット、S・ヴルゲンにおける「ファルハードと水路」の主題的展開—水資源をめぐる社会主義文学的自己犠牲譚の諸相」 発表3:遠藤仁(東洋研究所)「インド北西部の畜力揚水井戸—所謂ペルシア井戸の現況とその系譜」	
4	12月17日	オンライン開催(zoom) (13:30~18:00)	32名	2022年度 第4回 大東 西アジア研究会 発表1:澤口右樹(東京大学総合文化研究科博士課程) 報告タイトル:「現代イスラエルの女性兵士:ジェンダーとミリタリズムの民間関係」 発表2:藏田明子(大東文化大学非常勤講師/東洋研究所兼任研究員) 報告タイトル:「紛争、介入、ナショナリズムとジェンダー—アフガニスタン女性の経験」 発表3:中村菜穂(大阪大学/東洋研究所兼任研究員) 報告タイトル:「イラン立憲革命期の女性の詩—アールラムタージ・ガーエムマガーミー」 発表4:鈴木珠里(中央大学非常勤講師/東洋研究所兼任研究員) 報告タイトル:「イラン女性詩人が語る「女性・命・自由」:バルヴィーン・エエテサーミーからスィーミン・ベフバハーニーまで」	
No.	研究成果物(刊行物等)				
1	中村菜穂『イラン立憲革命期の詩人たち 詩的言語の命運』左右社、2022年6月6日				
所属研究員の活動					
No.	刊行物等				
1	・遠藤仁「宝石の国パキスタンの形成要因と先史時代の宝石」『パーキスターン』276(2022.4):12-17				
2	・林裕「アフガニスタンの現状と展望:タリバン政権の再興」『アジア・アフリカ研究』第62巻第2号(2022.4):18-27				
3	・吉田雄介「第一次世界大戦前にイランに輸入された東アジア産品の動向—中国産緑茶の輸入の盛衰を中心に—」『東洋研究』第224号(2022年7月):(29)-(56)				
4	2022年度夏休み公開講座「沙漠の人間像を求めて—大野盛雄の中東研究—」 ・原隆一「『大野盛雄フィールドワークの軌跡』—写真記録から読み解く」(2022.7.16) ・南里浩子「私と大野先生、50年前のイラン農村調査の思い出」(2022.7.23) ・林裕「日本人のアフガニスタン調査から50年。変わりゆく今」(2022.7.30)				
5	・石井啓一郎「N・ヒクメット、S・ヴルゲンにおける「ファルハードと水路」の主題的展開—水資源をめぐる社会主義文学的自己犠牲譚の諸相」『東洋研究』第227号(2023年1月):(51)-(85)				
6	・遠藤仁「インド北西部の畜力揚水井戸—所謂ペルシア井戸の現況とその系譜」『東洋研究』第227号(2023年1月):(1)-(20)				
7	・西川優花「水国法・水構成分配法からみるイランの水資源と慣習的水利権」『東洋研究』第227号(2023年1月):(21)-(50)				
8	・吉村武典「前近代カイロにおける水供給—給水施設「サビール・クッターブ」をめぐって—」『東洋研究』第227号(2023年1月):(87)-(114)				

岡倉天心（覚三）にとっての「伝統と近代」				
研究班の活動				
No.	開催日時	開催場所	参加人数	研究会（テーマ・内容・発表者）
1	7月2日	埼玉会館	50名	茶の湯文化学会東京例会 「小浜藩主酒井忠義の茶道具蒐集」（依田徹）
2	9月18日	東京藝術大学美術学部	オンライン参加	日本フェノロサ学会 第43回年次大会（池田久代）
3	11月17日	大東文化大学東洋研究所 秋季公開講座 「アジアの民族と文化」	10名	「レオナルド・ダ・ヴィンチと古典古代—東方・東洋との関連について—」（田辺清）
No.	刊行物等			
1	・ 単著 岡倉登志『岡倉天心の旅路』、新典社、2022年4月7日発行			
2	・ 共編著 吉永進一・岡本佳子・莊千慧編著『神智学とアジア—西から来た〈東洋〉』、青弓社、2022年8月29日発行、岡本担当部分；第6章「ウィリアム・スタージス・ビゲロウと神智学—近代オカルティズムが生んだアメリカ人仏教徒」、pp.128-151；「コラム 宗教会議の時代」pp.178-181.			
3	・ 岡倉登志「岡倉天心をめぐる人々—フェノロサ門下の友人たち（3）—福富孝季と民権運動」、『東洋研究』第225号、大東文化大学東洋研究所、2022年11月、pp.30-58.			
4	・ 田辺清「レオナルド・ダ・ヴィンチと古典古代—東方との関連について—」、『東洋研究』第225号、大東文化大学東洋研究所、2022年11月、pp.1-9.			
5	・ 池田久代「堀至徳資料編纂より見えてきたもの—堀至徳のインド：青春の光と影—」、『東洋研究』第226号、大東文化大学東洋研究所、2022年12月、pp.29-72.			
6	・ 岡本佳子「書評 岡倉覚三著／古田亮著・訳／芹生春菜訳注『新訳 東洋の理想—岡倉天心の美術思想—』—単純な図式化を寄せ付けない『東洋の理想』」、『図書新聞』第3571号、2022年12月17日、p.3.			
7	・ 単著 依田徹「茶会記に見る今泉雄作の交友関係—『記事珠』の記述を中心に—」、『五浦論叢：茨城大学五浦美術文化研究所紀要』29号、茨城大学、2022年12月、p.1-17.			
8	・ 単著 依田徹「小林永濯『彩画略法』について」、『國華』1528号、國華社、2023年2月20日 p.41-45.			
南アジアにおける包摂と排除				
研究班の活動				
No.	開催日時	開催場所	参加人数	研究会（テーマ・内容・発表者）
1	10月8日	Zoom および東松山校舎 第2研究棟3階 第2会議室（対面）	7名	(1) 石田英明 「現代ヒンディー語作家バグワーンダース・モールワールの作品に描かれたメーワート地方（ハリヤナ州）のムスリム社会と、現代ヒンディー語作家アブドゥル・ビスミッターが描くムスリム社会の比較研究について」 (2) 篠田隆 「インドにおけるムスリム「コミュニティ・キッチン」：計画の目的と運営状況—アーメダバード市のダーウーディー・ボーホラーの事例研究—」 (3) 鈴木真弥 「ダリトの atrocity 問題」 (4) 片岡弘次 「イクバルの『永遠の書』の内容と翻訳状況について」
所属研究員の活動				
No.	刊行物等			
1	・ ムハンマド・イクバル著、片岡弘次訳『永遠の書』大同生命国際文化基金、総頁数357 2022年12月2日			
2	・ 増木優衣、単著「ヴェールミーキはどこへ行けばよいのか—現代インドの清掃人カースト差別と公衆衛生の民族誌」春風社（2023年3月13日）			
インド洋が取り結ぶ東西交流の諸相に関する研究				
研究班の活動				
No.	開催日時	開催場所	参加人数	研究会（テーマ・内容・発表者）
1	5月20日	オンライン開催	5名	13世紀のインド洋貿易品としての織物—イエメン・ラスール朝治下アデン港税関連史料を用いて—（栗山保之）
2	8月20日	オンライン開催	5名	ハドラーミ—再緯度の移民の歴史：ハブシー家とアイダールス家の比較から—（新井和広）
3	12月2日	オンライン開催	5名	ヒジャーズにおけるマリア・テレジア銀貨の流通（太田啓子）
4	3月24日	オンライン開催	4名	イスラーム都市と水施設：歴史都市カイロのザビール・クッダブ研究（2023年3月調査報告を兼ねて）（吉村武典）
所属研究員の活動				
No.	研究成果物（いずれも論文）			
1	なし			

## 〔国際交流講演会〕

### 「新安船」を活用した中世東アジア海域交流史の教育方法論

高麗大学歴史教育科・副教授 鄭 淳一

2023.2.28 (火) 11:00 ~ 12:30 大東文化大学板橋校舎 2号館 2階 2-220 会議室

本講演は、14世紀前半の海底沈没船としてよく知られる「新安船」についての新たな研究成果および知見に基づき、東アジア海域交流史の叙述方法と教授・学習方法を模索することを目的にする。具体的には次の三点を取り上げる。まず、なぜ韓国の歴史教育では、日本史を自国史（韓国史）と連動させて学習したほうが良いのか、なぜその方法論が現実的なのかについて考察する。次いで、海域交流の実態を生かした日本史教育において「新安船」が有用な素材



になり得ることを検討するとともに、従来韓国の学界や教育界で等閑視されてきた日本史文脈の解釈が有する重要性を論じる。何よりも364点の木簡など多様な文字資料を上手く利用することで海域交流が持つ重層性、複合性、多様性、混種生が授業の現場で有益に生かされることを指摘する。最後には、「新安船」活用学習のためのアイデアとして幾つかの試みを紹介する。韓国の中学・高校歴史教科書では「新安船」がどう叙述されているのかを分析し、たとえ当該船舶のことが直接取り上げられていない教科書を使用する授業においても14世紀前半の海域交流が有する特質が十分活用できることを述べる。「新安船」をテーマとした例文および問いかけ、そして予想される学習者たちの反応などを一つの事例として提示する形で教育方法論を共有する。





## ■名簿

## 管理委員会委員 (5名)

- 1 栗山保之
- 2 田中良明
- 3 小塚由博
- 4 宮瀧交二
- 5 吉村武典
- 6 鈴木隆※
- 7 高橋あやの※

(※=オブザーバー)

## 専任研究員 (4名)

- 1 栗山保之 (所長)
- 2 鈴木隆
- 3 田中良明
- 4 高橋あやの

## 事務室 (2名)

- 1 金山弘通
- 2 宮本恵

## 兼任研究員 (15名)

- 1 小塚由博
- 2 高橋睦美
- 3 宮瀧交二
- 4 J アバイ
- 5 藏中しのぶ
- 6 齊藤哲郎
- 7 須田敏彦
- 8 滝口明子
- 9 ウルック・アンドリュウ
- 10 井上貴子
- 11 鹿錫俊
- 12 鈴木真弥
- 13 吉村武典
- 14 高田茂臣
- 15 新居洋子

## 兼任研究員 (70名)

- 1 相田満
- 2 芦川敏彦
- 3 アブドリ・ケイワン
- 4 鏡屋一
- 5 安保博史
- 6 新井和広
- 7 荒井礼
- 8 池田久代
- 9 石井啓一郎
- 10 石坂晋哉
- 11 石田英明
- 12 出田恵史
- 13 伊藤一彦
- 14 今井秀和
- 15 植松希久磨
- 16 江崎隆哉
- 17 遠藤仁
- 18 太田啓子
- 19 王宝平
- 20 岡倉登志
- 21 岡崎邦彦
- 22 岡本佳子
- 23 オレグ・プリミアーニ
- 24 片岡弘次
- 25 菅野友巳
- 26 藏田明子
- 27 小坂眞二
- 28 小林春樹
- 29 小林龍彦
- 30 小林敏男
- 31 齋藤俊輔
- 32 斎藤正道
- 33 笹生美貴子
- 34 佐藤志乃
- 35 佐藤信一
- 36 篠永宣孝
- 37 篠田隆
- 38 柴田善雅
- 39 嶋亜弥子
- 40 鈴木珠里
- 41 ソレマニエ 貴実也
- 42 高木ゆみ子
- 43 田中寛
- 44 田辺清
- 45 中林史朗
- 46 中村聡
- 47 中村士
- 48 中村菜穂
- 49 成田守
- 50 南里浩子
- 51 西川優花
- 52 布村浩一
- 53 浜口俊裕
- 54 林裕
- 55 原隆一
- 56 深見和子
- 57 福田和展
- 58 舟橋健太
- 59 フレデリック・ジラルル
- 60 細井浩志
- 61 増木優衣
- 62 松本公一
- 63 三田明弘
- 64 ムハマド・ズベル
- 65 矢ヶ崎善太郎
- 66 山下克明
- 67 由川稔
- 68 吉田雄介
- 69 依田徹
- 70 渡邊義浩

藝文類聚（巻51）訓読付索引

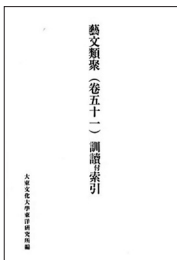
「藝文類聚」研究班（代表 田中良明）

芦川敏彦・藏中しのぶ・小塚由博・小林敏男・高橋睦美・田中良明・中林史朗・成田 守・浜口俊裕・宮瀧交二

2023年2月25日発行／B5判112（65,47）頁／ISBN 978-4-904626-47-4／頒価3,000円（税別）

「藝文類聚」は中国の類書の中でも早い成立に属する類書で、日本文学への影響は計り知れないものがある。その『藝文類聚』を巻ごとに訓読文を施し、四部叢刊に採録されている作品については校異を付し、最後に利用者の便を考えて重要語彙索引を掲載したものである。

本巻には『藝文類聚』巻51封爵部（総載封爵 親戚封 功臣封 遜讓封 外戚封 婦人封 尊賢絶絶封）の訓読文・校異・注（典拠）・索引を収めている。《既刊》巻1～16、巻45～50、巻80～89



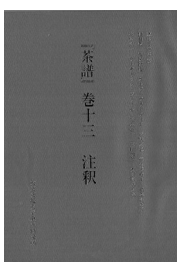
『茶譜』巻13 注釈

藏中しのぶ（代表）、相田満、安保博史、オレグ・プリミアニ、菅野友巳、笹生美貴子、高木ゆみ子、布村浩一、フレデリック・ジラル、松本公一、三田明弘、矢ヶ崎善太郎 共著／

2023年2月25日発行／B5変形判188頁／ISBN 978-4-904626-49-8／頒価9,000円（税別）

『茶譜』全18巻は、茶道流派の生成がきざし始めていた寛文年間（1661～1673）頃の成立とされ、茶道全般におよぶ総合的な類聚編纂書である。各項目について、千利休流・小堀遠州流・古田織部流・金森宗和流等、流派のちがいを対照的に提示しつつ、茶の湯や茶室にかかわるさまざまな記事を類聚編纂した茶道百科事典ともいべき性格を備えている。

本書は、『茶譜』最善本とみなしうる国会図書館本を底本とし、伝存する四種の写本（国会図書館本・静嘉堂文庫本・内閣文庫本・岩瀬文庫本）すべてを校合して【校異】を示し、校訂をくわえた【本文】を掲げ、【訓み下し文】【大意】を加え、さらに若干の【語釈】と【考察】を施したものである。《既刊》巻1～巻12



『天文要録』の考察 [四]

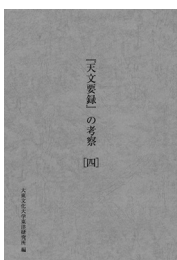
「天文」研究班（代表 小林春樹）

小林春樹・進藤英幸・高橋あやの・田中良明・中村聡・中村士・濱久雄・細井浩志・山下克明

2023年2月25日発行／B5判93（87,6）頁／ISBN 978-4-904626-48-1／頒価4,000円（税別）

現存する第三冊に当たる「月占第五」の前半部分の翻字、訓読文、現代語訳、語釈・参考資料を載す。他、余説「二十四節気の名義と順序」「天文占辞中の八卦が表す事物」「○夕○運」と数件の図表・索引を付す。唐の李鳳が撰した『天文要録』全50巻は、緯書や種々の天文占書から多くの記事を採録している貴重書であるが、新・旧の『唐書』以下の『芸文志』や目録類にはその書名さえ著録されていない。一方、日本にはつとに伝来し『三代実録』の貞観18年（876）の条など、多くの史料にその書名を見出すことができる。さらに江戸時代の貞享3年（1686）には前田家第五代の当主である綱紀の命によって鈔本が作られ、現在も前田尊経閣文庫に所蔵されている。

既刊 『天文要録』の考察 [一]、[二]、[三]



『東洋研究』論文総目録・著者索引（第1号～第227号（附）東洋研究所出版目録）

大東文化大学東洋研究所

大東文化大学東洋研究所編

2023年2月11日発行／A5 122頁／非売品

東洋研究所では創立100周年（2023年2月）を記念し、大東文化大学創立100周年記念事業（2023年9月）の一環として、研究所機関誌『東洋研究』論文総目録及び出版目録を一冊にまとめて発行する運びとなった。

これまで版を重ねてきたが、今回はその後2022年度までに出版された『東洋研究』の掲載論文および研究所出版物を新たに増補・採録している。



第224号(2022年7月25日発行)

渡 邊 義 浩／呉起・孫臏の兵法と儒家

篠 田 隆／インドにおける竈、燃料、水の利用にみられる社会格差—「インド人間開発調査」  
個票データの分析—

吉 田 雄 介／第一次世界大戦前にイランに輸入された東アジア産品の動向—中国産緑茶の輸入の  
盛衰を中心に—

A.R. ウルック／日本の絵馬による探究—視覚的オブジェを用いて聴覚・視覚情報を得る—

第225号(2022年11月25日発行)

布 村 浩 一／「管仲随馬」の享受史—「成長」する故事

田 辺 清／レオナルド・ダ・ヴィンチと古典古代—東方との関連について—

中 村 聡／日本に於けるプロテスタント第一世代の特色

岡 倉 登 志／岡倉天心をめぐる人々—フェノロサ門下の友人たち(3)—福富孝季と民権運動

柴 田 善 雅／帝国燃料興業株式会社の関係会社投資と戦後処理

第226号(2022年12月25日発行)

小 坂 眞 二／陰陽道研究の新展望(上)

松 本 公 一／香炉の茶の湯についての基礎的考察

藏 中 しのぶ／「冤」の連環—『南総里見八犬伝』「対牛楼の仇討ち」と「赤岩庚申山の妖猫退治」  
の照応—

齋 藤 俊 輔／ポルトガルのインド領の兵力—アントニオ・ボカロ著『東インド領すべての  
要塞、都市、そして集落の図会』の分析から

池 田 久 代／堀至徳資料編纂より見えてきたもの—堀至徳のインド：青春の光と影—

第227号(2023年1月25日発行) 西アジア地域をめぐる「水」の諸相特集号

遠 藤 仁／インド北西部の畜力揚水井戸—所謂ペルシア井戸の現況とその系譜

西 川 優 花／水国有化法・水公正分配法からみるイランの水資源と慣習的水利権

石 井 啓一郎／N・ヒクメット、S・ヴルグンにおける「ファルハードと水路」の主題的展開—水  
資源をめぐる社会主義文学的自己犠牲譚の諸相

吉 村 武 典／前近代カイロにおける水供給—給水施設「サビール・クッターブ」をめぐる—

この他の東洋研究所刊行物についてはホームページをご覧ください。

◆訃報◆

・謹んでお悔やみ申し上げます・

加治 明 殿(元東洋研究所兼任研究員)(2022年4月24日ご逝去、享年89歳)

刊行図書取扱店

■(有)池上書店

〒175-8571 板橋区高島平1-9-1 大東文化大学2号館B1  
TEL: 03-3932-7567 FAX: 03-3932-7544  
E-mail: ike-book@smail.plala.or.jp

■大東文化大学内購買部 (株)進明堂書店

〒355-8501 埼玉県東松山市岩殿560  
TEL: 0493-34-4430 FAX: 0493-34-5622  
E-mail: info-daigakuten@shinmeido.co.jp

■汲古書院

〒101-0065 千代田区西神田2-4-3 高岡ビル4F  
TEL: 03-3265-9764 FAX: 03-3222-1845  
E-mail: kyuko@fancy.ocn.ne.jp

■東方書店業務センター

〒175-0082 板橋区高島平1-10-2  
TEL: 03-3937-0300 FAX: 03-3937-0955  
E-mail: tokyo@toho-shoten.co.jp

# 2023年度 東洋研究所 秋の公開講座のお知らせ『アジアの民族と文化』

主催：大東文化大学 東洋研究所

日程・テーマ・講師	講義概要
<p>11月9日(木) 13:00～15:00 『アラブの船乗りたちとその航海技術、そしてウミヘビ』 東洋研究所 所長・専任研究員 教授 栗山保之</p>	<p>アラブといえば、砂漠とラクダを想起する方が日本では多いようです。しかし、アラブは歴史的に、海とのかかわりもまた深いのです。本講座では、このアラブと海とのかかわりの一端として、アラブの船乗りたちについて紹介いたします。とくに、ポルトガル来航期のインド洋におけるアラブの船乗りたちと、彼らの航海技術を概観し、あわせてその技術の一つである陸標としてのウミヘビについて考えてみたいと思います。</p>
<p>11月16日(木) 13:00～15:00 『中国のロシア政治研究とロシア・ウクライナ戦争の「教訓」』 東洋研究所 専任研究員 教授 鈴木隆</p>	<p>2022年2月に勃発したロシア・ウクライナ戦争は、中国とロシアの政治的結託、これによる国際社会の新たな分断を予想させるものとなった。講師(鈴木)は、2023年に出版された下記の共著書の中で、『お仲間』の政治学：中国のロシア政治研究とロシア・ウクライナ戦争の『教訓』と題する論文を発表した。本講義ではこの内容を解説する。可能であれば、参考図書の当該章を事前にお読みいただくのが望ましい。(参考図書)川島真・鈴木絢女・小泉悠編著、池内恵監修『ユーラシアの自画像』(PHP研究所、2023年)</p>
<p>11月30日(木) 13:00～15:00 『インド食文化の変容：伝統と現代化の融合』 東洋研究所 兼任研究員 大東文化大学名誉教授 篠田隆</p>	<p>インドにおける食文化の近年における変容について、伝統と現代化の融合の観点から講義する。わたしは1980年代以降、毎年インドを訪ね、食文化を含む各種調査を行ってきた。現地での聞き取り結果や写真、動画を利用して、食文化の変容を具体的に伝えたい。なお、食文化は宗教や地域により異なっているのも、それらの多様性についても、簡単に説明する予定である。また、質疑応答の時間を設けるので、積極的に質問をしていただけるとありがたい。</p>

- 会場：大東文化会館 3階 K-302 研修室(予定)
- 交通：東武東上線『東武練馬駅』下車徒歩3分
- 受付期間：10月16日(月)～20日(金)
- 受講料：無料
- 定員：30名(先着順)

【問合せ先】 大東文化大学 東洋研究所  
TEL：03-5399-7351 FAX：03-5399-8756 E-mail: tokenji@ic.daito.ac.jp

### ※ 注意事項

- ・受付は先着順とさせていただきます。定員を超過した場合は、やむを得ずお断りの連絡を差し上げるようになります。あらかじめご了承ください。受付期間は、地域連携センターのオープンカレッジのパンフレットに掲載します。
- ・駐車・駐輪はできません。お車、バイク、自転車でのご来場はご遠慮ください。

新型コロナウイルスは2023年5月8日以降、5類感染症(感染力や重篤性などに基づく総合的な観点からみて危険性が最も低い感染症)に移行しましたが、その後感染が急増しております。今後の状況次第では、開催の中止や日程変更等の事態が生じる可能性があります。講座の中止や変更等が発生した場合、東洋研究所ホームページにてお知らせいたします。

大東文化大学 東洋研究所 所報 No.79

2023年7月25日発行

印刷：(株) 東京技術協会

編集・発行 大東文化大学東洋研究所

〒175-0083 東京都板橋区徳丸 2-19-10

TEL (03) 5399-7351 FAX (03) 5399-8756

E-mail : tokenji@ic.daito.ac.jp

URL http://www.daito.ac.jp